障害者とスポーツ

恵まれた大会

第26回大分国際車いすマラソン大会に向けて

□5■

日本人活躍で情報発信を

「楽しく続けて」

今年で二十六回目となる大分国際車いすマラソン大会。最速のT53／54男子で日本人の優勝者は出ていないが、今年も世界のトップ選手と肩を並べる県内選手の活躍が期待されている。

大分市の廣道純選手（三）はスポンサー契約のみで車いすレースに出場する〝プロ〟だ。「マラソンが大変だと思っては駄目。きつい思いをして四十二キロを走っているのではなく、楽に走っていると思って楽しく続けてほしい」と初チャレンジャーにエールを送る。

昨年の大会でエレンスト・ヴァン・ダイク選手（南アフリカ）と優勝を争った笹原廣喜選手（三）＝豊後高田市＝は練習に集中できる環境を整えようと、二〇〇四年に仕事を辞めた。いわばノンプロで競技を続けている。

「トップ選手はいかにトレーニングをしたかが結果に出る。一番練習した人が一番になると思う。北京パラ五輪までは認知度は上がっているとはいえ、それほどメジャーとは言えないこの競技で廣道選手以外のプロは日本にはいない。

大会でエレンスト・ヴァン・ダイク選手と優勝を争った笹原廣喜選手（三）

昨年の大会では優勝を争った笹原廣喜選手

日本唯一のプロとして活躍する廣道純選手

〝当たり前〟に

「大会で力を試してほしい」と話す。

「やりたいことをやる。大とが大事。障害者スポーツが当たり前になり、多くの人が理解してくれる社会となるために日本人選手がもっと活躍しなくては」と話した。

（この連載は社会部・太田武志、別府支社・藤原留美が担当しました）

＝終わり＝

さまざまな国・地域から選手が集い、沿道からは多くの声援が飛ぶ大分国際車いすマラソン大会。今後の障害者スポーツ振興に向けて、大分の良さをどう情報発信していくかが課題だ。

廣道選手は「大分の大会しか出ない地元選手は多いが、どんどんほかの大会にも行ってほしい。こんなに恵まれた大会はよそにはないはず。大分のような大会が広がることが大事。障害者スポーツが当たり前になり、多くの人が理解してくれる社会となるために日本人選手がもっと活躍しなくては」と話した。

（この連載は社会部・太田武志、別府支社・藤原留美が担当しました）

＝終わり＝

わす

会見をする（右から）小林玖珠町長、石川副知事、首藤由布市長、坂本九重町長（県庁）

◆解説◆四者協は小火器訓練を受け入れた。九月の広瀬知事発言を機に受け入れへのレールが敷かれ、〝条件闘争〟も実を結ばないまま、国の圧力に押し切られた形となった。

たとは思えず、決定までの過程は「拙速」と言われても仕方がないだろう。従来の訓練に小火器訓練が上乗せされる状況となるだけに、住民側の反発は必至だ。

（由布支局・百崎浩嗣）

JA日出

日出署は二十二日午後、道交法違反（酒気帯び運転）の現行犯で、日出町真那井、JA日出町指導販売課長容疑者（四）を調べでは、十五分ごろの国道10号で運転。信号で軽乗用車に員が酒のにき、飲酒検知中〇・二五ルを検出し飲んだかな

佐藤容疑者開かれた県野菜販売の同JAのト

大分合同

きょう

問い合わせ ☎097・647、F・538・

＝主催・

▽県美術展巡（午前9時重体育館＝

▽わさだ住宅（午前10時タウンそば月31日まで

＝後援行

▽マレーシア時・あけの